

優秀賞 兵庫県 大谷 則子 様 (50代)

昔から言われているように、人生には上り坂、下り坂、そして「まさか」があります。よく結婚式のスピーチで話されるセリフですが、まさか本当に我が身に起こるとは思っていませんでした。

昨日と同じように始まると思っていた、その日、兄が突然倒れました。緊急搬送され、集中治療室で11時間に及ぶ手術。一命は取り留めましたが、2ヶ月経つ現在も集中治療室にいます。一時は意思疎通が出来たのですが、今は治療上の鎮静により、眠りについています。これから先、兄や家族が生きていく上で必要となるものは、希望とお金です。でも果たして本当にお金なのでしょうか。兄は大学を卒業してから病で倒れるまで、ずっと会社勤めをしています。健康保険加入のおかげで毎月の治療費は一定の支払額まで済み、年金制度加入による障害年金受給や介護を受けられる可能性があります。今まで兄や私や他の方々が支払っている健康保険・厚生年金保険料が自分だけではなく、必要とされる人が受けとれるサービスとなる、これが「社会的扶養」の考え方なのだと実感しました。

サラリーマンにとって年金の保険料は大きな負担です。給料が増えても厚生年金等の社会保険料も増額となり、結局のところ手取り額は同じという現象はよく耳にします。しかし、社会保障制度があることが、個人の「まさか」の人生の支えになってくれます。そして支えられた個人の経済活動が、また誰かの支えになっているのです。支えられながらも、自分も社会に貢献出来ているという思いこそ、その人の生きる希望になると信じています。すべての人は歳をとり、やがて死にます。年金制度はその過程をスムーズにする為の保険の仕組みです。加齢（老齢）・病気（障害）・死亡（遺族）という人生の場面で、年金制度は、年金給付という「お金」だけでなく、安心という大きな付加価値を私たちに与えてくれます。受給された年金は、モノやサービスと交換することで、保険料を負担する現役の若い世代にも循環していき、経済が発展していきます。例えは変ですが、「金は天下の回りもの」的な感覚ではないでしょうか。この流れが滞ることなく循環することで、すべての方々が護られる社会になるのではないのでしょうか。

私が若かった頃は、「国民年金なんて貰えるかどうか分からないし、死んでいるかも知れない。元がとれるか分からないから、納付書が届いても無視したらいい。」と仲間内で話していました。しかし年金制度は保険です。今回のことで改めてそう思いました。そして社会全体で高齢者や障害者、遺族を支える社会的扶養の仕組みである公的年金を考えた時、単なる保険ではなく「社会」が頭につく保険料は、そこに保険料の負担が公平であることが伺えます。厚生年金保険料は給料に応じた負担をし、負担に応じた給付となります。保険料額が一定の国民年金保険料は、のっぴきならない状況時には申請免除の手続きがとれます。この公平な納付が自分の給付に結びつくということは、国民に保険料納付に対する納得感を与えてくれます。

今、兄や家族にとって一大事の嵐の中で、年金制度があることを本当に有難く感じています。受給手続きこそ少し先になると思いますが安心感は半端なく、この事を皆さんに知っていただきたいと思いこれを書かせていただきました。年金制度に心より感謝しています。